

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishii

## 第8章「ひとえに他力にして」

『歎異抄』は、第一章から第七章まで、一貫して、「念仏の信」に開かれる『教行信証』という本願（他力）の仏道の具体性が語られてきた。そこに必然的に、念仏とは何か、念仏に生きる者にとって、念仏とはいかなる意味をもつのかという問いがおこってくる。その問いに答えて、念仏は諸善万行という人間の諸行為の中の一つの営みではなく、「大行」つまり「如来の行」であることを明らかにされているのがこの第八章であろう。それでは、「大行」「如来の行」について尋ねてみたい。

### 如実修行

世親菩薩は、称名とは、『浄土論』において「如実修行相応（実の如く修行し相応せん）」であるといわれる。しかし、真実のままに修行するといっても、この身は、「よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなき」、「火宅無常の世界」を生きる「煩惱具足の凡夫」の身（『歎異抄』後序）でしかない。この身は、徹底して「不実の身」である限り、「如実修行」など、ありえるはずがない。人間におけるどんな行も善も「わがはからい」から生まれる以上、すべて「虚仮の行」「雑毒の善」と、宗祖は言い切られる。では、何が「如実修行」といえるのか。曇鸞大師は『論註』において「如実修行」について、

真如はこれ諸法の正体なり。体如にして行ずれば則ちこれ不行なり。不行

にして行ずるを如実修行と名づく。（観察體相章）

と了解された。この文をもとに「如実修行」を、仲野良俊先生は、「如が修行する」と教えて下さる。不如の人間が如を行ずるのではなく、如が衆生の上に如を行ずることによって、如を実現する。換言すれば、法そのものが法蔵菩薩となって、法そのものを衆生の上に成就しようとする。これが本願であろう。そこには、人間のはからい・努力の入る余地もない。私のいのちの根元から、私を突き破ってくる世界がある。人間にとって、念仏はあくまで不行であり、行ずるのは仏のみである。これが「如実修行」であろう。

### わがはからい

しかし、自己の現存在と共にあるとってよい「わがはからい」とは、いかに強靱で根深いものであろうか。「如来の行」である念仏までも、わが手柄とする私がここにいる。

本願の嘉号をもって己が善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず、仏智を了らず、（内至）報土に入ることなきなり。

（化身土巻・本）

他宗には、親のため、また、何のため、などとて、念仏をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり。

（御一代記聞書180条）

亡き親を迷いの存在としか見ない「無明性」、身勝手な目的達成のために念仏を手段化し利用しようとする「傲慢性」。他宗とは、他人事では映してない。

だからこそ「念仏は行者のために、非行非善なり」と、「非（非ず）」という完全否定語をもって、人間のもつ功利心（エゴイズム）を明らかにされた。念仏までも「わが行・わが善」として誇ろうとする「わがはからい」という人間の自己関心・分別心を否定し、この自力の執着心からの解放を促し続ける用き、この「非」の一字にこそ、「ひとえに他力にして」という、「他力」の用きの具体性が、そこに表現されてある。